

No 2446



教育ルネサンス

考える体育 6

新聞@スクール

高田 彬成 あきしげ さん
帝京大学教授



子供同士が協力し、積極的に運動に取り組む姿勢を育む「考える体育」の実現に何が必要か。教科調査官として学習指導要領改定に携わった帝京大の高田彬成教授(体育科・保健体育科教育学)と、元小学校教諭でT.O.S.S.体育授業研究会の根本正雄代表に聞いた。



根本 正雄 さん
T.O.S.S.体育授業研究会代表

運動の楽しさ・心地よさを

技能の習得や体力の向上を中心にすえ、ひたすら反復練習する授業はいまだにみられる。運動の苦手な子は、一時的に体力が向上しても運動嫌いになる。卒業すると運動をしなくなり、結果的に肥満などの生活習慣病につながるという。

技能としての体育の目的は、健康の保持・増進と豊かなスポーツライフの実現にある。大切なのは、子供たちが運動の楽しさや心地よさを味わうことで運動する習慣ができ、体力の向上につながるという視点だ。2020年度以降の新学

習指導要領は、運動の苦手な子にも配慮している。運動について、「する」「みる」「支える」「知る」という四つの視点を示し、自分で「する」ほかに、多様な運動への関わり方、楽しみ方があることを示した。

みんなで励ましあったり、教えあったりし、仲間と汗をかけば充実感や達成感を味わえる。だから学校で、

効果的な教え方学ぶ必要

公立小学校に40年近く勤め、現役教員らに体育の指導法を講演している。最近では、運動が得意な子と苦手な子の二極化と、児童期の運動経験が少ないためか、実技指導の苦手な若い教員の増加を感じる。

公立小学校に40年近く勤め、現役教員らに体育の指導法を講演している。最近では、運動が得意な子と苦手な子の二極化と、児童期の運動経験が少ないためか、実技指導の苦手な若い教員の増加を感じる。

公立小学校に40年近く勤め、現役教員らに体育の指導法を講演している。最近では、運動が得意な子と苦手な子の二極化と、児童期の運動経験が少ないためか、実技指導の苦手な若い教員の増加を感じる。

公立小学校に40年近く勤め、現役教員らに体育の指導法を講演している。最近では、運動が得意な子と苦手な子の二極化と、児童期の運動経験が少ないためか、実技指導の苦手な若い教員の増加を感じる。

*この連載は、服部真、新美舞が担当しました。次回は、高校での「多言語教育」をテーマに取り上げる予定です。